

p.43 1.3 『三国史事』 → 『三国史記』

p.82 1.5 王健群 → 耿鉄華(ルビ - こうてつか)

補追(7/5)

p.94 1.7 「気・形」に → 「気・形」と

p.110 1.4 『易』、『書』(書道)、『礼』、『春秋』(史)  
→ 『易』『書』(尚書、書経)『礼』『春秋』

p.120 1.12 旅人 → 御行

p.136 1.6～ 書(道)を重んじ、漢詩も美しく書くことが求められる。→  
最古の歴史書で、秦代以前の古い字体への関心も生んできた。書(道)も字体が  
肝心。

詩と歌は密接に関連していた。→ トル

p.163 1.8 筆記録とともに → 筆記録をもとに

1.11 活用語尾を、 → 活用語尾に、

p.166 1.6 いたっが → いったが

p.171 1.7 精神があるだが、 → 精神がある。だが、

p.177 1.3 「春の夜の」の歌でも → 「春の夜の」の歌も

p.195 1.6 北宋に本拠を移した → 湖北に本拠を置いた

p.214 1.3 口語体は地の文まで → 地の文まで口語体のものは

p.229 1.1 遠くを眺め、 → 遠くの眺めを、

p.325 1.1 釜田喜三郎「太平記」…… トル(後と重複)

p.327 1.5 『愛神と美神と』をめぐって、『中村真一郎手帖』第三号 下線部に訂正

以上、お詫びして、訂正する。

① について。もとの文章では、『書経』について知識のない人には、まるで書道の本のようにとれてしまいますので訂正します。漢代に孔子旧宅の壁中や宮廷図書館などから発見された『尚書』には、当代の「今尚文書」(隸書体)とは異なる秦代以前の字体(「古文」及び「篆書」)があったとされ、以降、字体により「今文尚書」、「古文尚書」、篆書を真似た「偽古文尚書」がつくられ、真偽も論じられた。このように古い字体への関心を盛んにした経典が『書経』の名で呼ばれるようになるのは宋代以降のこと。

なお、『書経』については鈴木『生命観の探究』を参照されたい。

②につき、神秀は一度、洛陽を出て湖北に移った。当時の勢力は都一帯。のち荊州へ。なお、「南宗禅」「南宋禅」、「北宗禅」「北宋禅」は、どちらも用いる。 以上